薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・

２０２２年
９月２日
第１３６号

ヤマノイモ（ヤマノイモ科）

久しぶりの薬草園、第三圃場のヤマノイモの花が気になり探しましたが見当たりませんでしたが、「むかご」がアチコチの葉腋に付いているのが見られました。日本原産で、本州、四国、九州に自生する、つる性の雌雄異株植物で多年草です。根茎の粘性が強く、とろろとしてご飯にかけて食します。同属のナガイモは、中国原産で別種になります。両種はよく似ていて見分けがつきにくいですが、さらに似ているオニドコロという種もあり、こちらの根茎は苦くて食用にはなりません。見分け方は葉の付き方で、ヤマノイモとナガイモの葉は対生で、オニドコロは互生、ヤマノイモの葉柄は緑色で、ナガイモはやや紫色を帯びます。生薬のサンヤク（山薬）は、ヤマノイモまたはナガイモの周皮を除いた根茎を基原とし、補気薬として八味地黄丸などに配合されます。

ヒシ（ミソハギ科）

管理棟横にある水槽では、水面に放射状に広げた葉の間に白色の小花が見られます。葉は葉柄が空気を含んで浮き袋のようになり、水面を覆います。近縁種にオニゲシとヒメビシがあり、ヒシの果実はトゲが２本、ヒメビシの果実は小型で細いトゲが４本、オニビシの果実は大型でトゲが４本あります。ヒシの果実はデンプンを多く含み、茹でて食用にもなります。また、ヒメビシ、オニビシの果実は忍者の撒きビシとして使用されました。これら３種の果実が、生薬のヒシノミ（菱実）となり、日本での民間薬としては、健胃、強壮、解毒を目的に、中医学では、「菱」の名で、補脾、除煩、止渇、清暑熱を目的に使用されます。漢方製剤には配合されません。